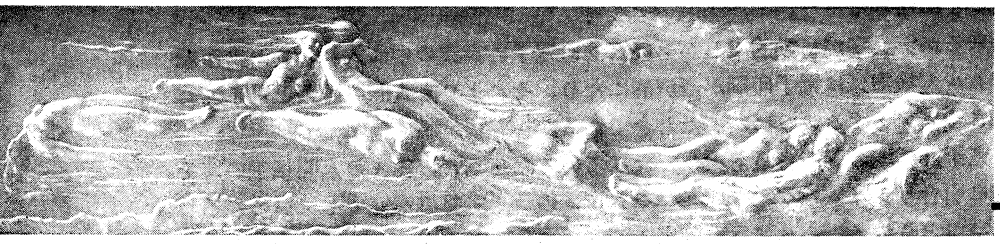
京都大学附属図書館報



静脩

1968年 5月

Vol. 5, No. 1

The Kyoto University Library Bulletin

明日の図書館

坂井利之

印刷された文字，手書きの古文書，自然科学の雑誌，人文科学の古今東西の書物，これらが分類し，整理して置かれている図書館の書庫，閲覧室には文献の目録，索引などのカードがおかれ，それらを人がひもとき，写し出して貸出しの手続きをする。期待通りのものもあり，的はずれのものもあろう。いそがしくて図書館に足が運び切れないときにはどうする。居ながらにして内外の本の要約，内容が自国語で判り，必要なものが漏れ落ちなく捜し出せる。そんなことは夢であろうか。

自分の調べたい内容をかいた書物や関連の論文が掲載されている雑誌が判らないだろうか。ある項目のかいてある書物の名前，ページなどその本を読まずに索引出来ないだろうか。自分の欲しい項目に関連した所だけをコピーか印刷して送ってくれることは全く不可能であろうか。文字だけでなく講演とか放送で関連のあるものもこれを文字として編集してくれたら文句がないがとも思う。

全くなまけものか，切り売り屋のような注文とも見えるが，こんなことが近いうちにかなり実現しそうである。

進歩のはげしい分野では分類そのものもあやしくなってくる。そこで図書カードの形式をある時点で変えたり，購入図書の案内と内容項目による通知先の選択なども望ましい。このようなことをするのは人間わざではとても経済的にはできない。そこでアメリカなどでは電子計算機の助けをかりて膨大な現用図書カードの変更だけでも合理的にできないかを大学図書館で鋭意研究中である。また研究者に周知させる方法として，1週間毎には書名とか雑誌の論文タイトルをそのまま，1ヶ月毎には要約を，3ヶ月とか半年毎には分類整理したものなど必要な人に提出することがノンプロプイットの会社で行なわれている。ソ連でも図書を人間のための文字の形から電子計算機の言葉である符号に変えて記憶させておき遠方の所から問合せていろいろ答えてくれる明日の図書館を電信図書館と名づけている。書庫の中の書物，リールにかかったマイクロフィルム，電子計算機の磁気記憶装置とその情報の記憶の仕方も販売の形態も変わることはもちろんである。

文字がなくなるとは思われない。しかし活字が電波と結合し，電気的な記憶として電子計算機により編集，要約，検索，抽出，印刷などが行なわれる傾向は否めない。本がいつも1冊の本として存在するか，電気的にばらばらにされ，要求に応じて編集，印刷，製本されるかもしれない。単に人間が書庫に入るというような形でなく，電気的な形式の書物と，要求する人間とが何度か対話をして，欲しいものを電子計算機に伝えて納得した上でその中味を

印刷してもらうことになるだろう。

いつそれが出来るか。文字が自動的でしかも経済的に電子計算機の中に入れられる文字読取が完成し，フィルム検索又は電子印刷が経済的になり，それよりも人間の言葉と電子計算機の言葉とがうまくマッチするようになったときである。

そのときには電子計算機の記憶容量も大きくなっているだろうし，個々の人間相手のおそい会話も経済的に引合うタイム・シェアリング・システムの電子計算機が完成しているだろう。

日本文字の漢字をどうする，それが自動的に入るだろうか。そのような心配も当然であるが，ある程度の規模のときはそれほど決定的な困難はないものと思う。　（工学部教授）

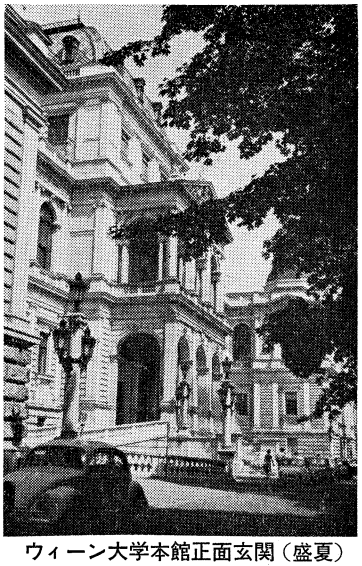
――――――外国の大学図書館

ウィーン大学の図書館のことなど

安　川　舜　朗

森とドナウと音楽の古都ウィーン――この典雅なたたずまいの中に現代ドイツ語圏の大学の中で最古の歴史を誇るウィーン大学（1365年創立）の壮麗な新ルネツサンス様式の本館がある。

カトリック神学，福音神学，法・国家学，医学，哲学の5学部を擁するウィーン大学には Universitätsbibliothek と呼ばれる総合図書館と，Bibliothek für Rechtswissenschaft と呼ばれる法学図書館の二つの図書館があるが，その他に各学部の多数の Institutがそれぞれの専門において独自の図書室をもっており，またザルツブルク郊外のヴォルフガンク湖畔にある研修寮には大学が毎年夏ここで開く法文系集中講座のために Bibliothek für die Sommerhochschule（夏季大学図書館）が併設されている。



ウィーン大学本館正面玄関（盛夏）

総合図書館は大学本館の正面玄関から哲学部に通ずる右側の大階段を登り，更に逆の方向に小階段を登りつめたところから始まる大回廊の最初の曲がりかどにある入口の大とびらを開けるとモダンで明るい Vorhalle がある。ここで先ず正面の携帯品預り所にコートなどを預ける。右側を少し上ったところはホールになっていて中央には戦後刊行書の分類カード台が整然と置かれ，周囲に並んでいるショウ・ウィンドウの中には各部門の最新刊書の実物が展示されている。左手の登録貸出関係事務所を経て小閲覧室に通ずる入口の横から階上に登るとぎっしりカード・ボックスの詰まった目録室の前に出，その右隣りが大閲覧室となっている。螢光照明に改装された階下各室の軽快な色調に反して，大閲覧室の内部は入った瞬間異様に暗く重苦しい感じを与える。周囲の採光窓が書架でことごとくしやへいされている大広間に二百席以上の古風な机が黒々と続き，照明は各席ごとについている昔ながらの黄色い電球のスタンドだけである。しかしこうしたふんい気も慣れてくると不思議に落着いて感じられ，読書に集中力を与えるためか，毎日朝9時から夜の8時までの開館中いつ行ってもほとんど空席はなく，机を照らす電光の列は静けさということを除けば，フル・メムバアが着席したオペラ座